

寄稿

統一思想の靈界編



韓国統一思想研究院院長

이 상 현
李 相 軒

序

「統一思想の靈界編」とは、統一思想の立場から文先生の教えのうち靈界に関する部分を整理して一つにまとめた理論部門をいう。

これまで、靈界に関する参考資料不備のため、『統一思想要綱』にはこの靈界に関する教えを掲載していなかった。それが最近ようやく、靈界に関する文先生の教えのあらましをほぼ整理でき、またこれに関する参考書籍もかなり揃ってきた。

そこで、今後『統一思想要綱』に新しく掲載する靈界編の内容の要点を、あらかじめ次の題目にまとめ紹介する次第である。すなわち、「原理世界を開いた創造とその目的」および「非原理的世界の価値階層」、「靈界の四大階層の内容」および「靈界の特別階層」などの題目である。

本論

(一) 原理世界の相似の創造と創造目的

(1) 相似の創造

神はご自身の性相と形状（人間の性相と形状）の二性性相にかたどって無形実体世界（靈界）と有形実体世界（地上世界）を創造された。ここにおいて、性相は主体、形状は対象であるため、靈界が主体で地上世界が対象である。

(2) 創造の目的

創造は心情を動機とする（心情動機説）。創造の目的は三大祝福を完成し、理想家庭および理想世界を実現し、神が人間とともに永遠の幸福と喜びを享受することであった。

1 地上世界の創造目的

寄稿

A 男女の三大祝福完成

① 第一祝福完成

人間は神の心情を体恤たいしゆすることによって、人格を完成する。また人格完成のためには、内的に自身の心（生心）と体（肉心）が一つになり、外的に他の人と一つになる自己修練が必要である。

② 第二祝福完成

男性は自分の妻に対して、女性は自分の夫に対して、創造本然の愛を与え、総合愛を実現するとともに、子女を繁殖して養育する。

③ 第三祝福完成

万物を愛で主管し、万民に愛で対することによって、万物への愛と万民への愛を体験する。

B 三大祝福完成後、一生涯神の眞の愛を實踐して さまざまな万物を愛する。その理由は？

四大心情圏の形成および維持のため、そしてさまざまな人を愛し、さまざまな万物を愛することによって、真の愛の多様な内容を体験するためである。

C 霊界生活のための準備期間

地上で三大祝福を完成する一生の間は、子女を生んで育てながら、霊界で永遠の幸福を享受するための自己修練の期間である。すなわち、人間にとって地上世界は子女繁殖の場であり、霊界生活に備える修道の場なのである。

2 霊界（天上世界）の創造の目的と幸福の生活

神は、人間が地上世界の生活を完了した後に、神（真の父母）に侍って永遠の幸福の生活を享受する世界として霊界を創造された。それゆえ霊界では、愛の生活自体が幸福なのである。それは神（真の父母）に侍る愛の生活であり、四位基台にもとづいた四大心情圏の生活、すなわち家庭愛の生活である。

言い換えれば、神を中心とした永遠なる夫婦愛の生活で

あり、神を中心とした隣人愛（万人愛）の生活であり、神を中心とした万物愛（自然愛）の生活である。それ自体が喜びの生活なのである。愛の生活は疲れることも飽くことも知らず、常に生命力が躍動する生活だからである。

3 原理的な霊界の階層

墮落のない地上世界において、四位基台を完成した霊人たちの行く創造本然の霊界は、一つの霊界、つまり一つの天上天国があるだけである。しかし、天国にも縦的な等級がないわけではない。

地上で愛の功績が比較的少ない霊人は低い等級に属し、地上での愛の功績がかなり高い霊人たちは中間等級に属し、地上での愛の功績が最も高い霊人は天上世界でも最高の等級に属するようになる。

しかし同じ等級においても、家庭の序列によって中心と周辺の差がある。地上での序列の高い祝福家庭はより中心に位置し、序列の低い家庭はより外側に位置するのである。

(一) 非原理的世界の価値階層

ここに述べる非原理世界とは墮落世界を意味し、この世界には神の復帰摂理（み言による再創造の役事）によって、善または愛の功績に差が生じるのであるが、その差から大まかに見て四つの階層に分かれる。この階層は愛や善の生活、つまり価値生活の実績に関する階層であることから、「価値階層」と名づけてよいであろう。

ここに述べる非原理世界とは墮落世界を意味し、この世界には神の復帰摂理（み言による再創造の役事）によって、善または愛の功績に差が生じるのであるが、その差から大まかに見て四つの階層に分かれる。この階層は愛や善の生活、つまり価値生活の実績に関する階層であることから、「価値階層」と名づけてよいであろう。

(一) 非原理の地上世界の四大価値階層と特別階層

A 四大価値階層

① 第一階層（価値不在の階層）

第一階層は完全に自己中心の生活を営む階層、いわば自分の利益のみを追求する階層である。これらは日常生活で次のような不道徳を平気で行う。

虚偽、詐欺、謀略、不正、腐敗、殺人、

強盗、性暴行、嫉妬、妬み、憎悪、

闘争、貪欲、物欲、性欲、憤怒など

第二階層は、神を知らないが良心に従って善の生活を行う階層であり、良心に反することをを行うこともあるが、より多く善を行う階層である。「原理講論」でいう「宗教生活はしなかったが、良心的に生きた」（二三五ページ）善良人々、すなわち良心家、慈善家、愛国者、教育家、善を積んだ人、徳のある人などがこの階層に属する。また、神の存在を知らずとも神のみ旨を正確には知らず、ただ善の生活を地道に続けている者もこれに属する。

③ 第三階層（長成的価値階層）

第三階層は、神の存在はもとより、神のみ旨を知ってそのごとく善と愛の生活を追求する階層で、真のクリスチャンおよび同等の水準にある仏教徒、儒教徒、回教徒、そして道人、義人などがこれに属する。

④ 第四階層（完成的価値階層）

第四階層は、神の存在とみ旨だけでなく神の愛までも知り、み旨と愛を万人に実践する階層であり、イエス様をはじめとするさまざまな宗教の教祖にあたる人々がこの階層に属する。この階層での神は、必ずしもキリスト教の神だけではなく、広義の神として仏教の如来、儒教の天、回教のアラー、天道教の神などもこの神の概念に含まれる。

ちなみにこの段階の神の愛は、主に人間どうしが横的に授受する愛であって、家庭的四位基台を中心とした四大心情圏の愛は含まれていない。

B 特別階層

非原理的世界における復帰摂理歴史の終末期には、メシヤ降臨によって価値生活の特別階層が出現する。それは、歴史の終末期にメシヤが降臨して地上天国建設のための祝福家庭を立て、その教を拡大するからである。すなわち終わりの日の特別階層とは祝福家庭の階層を指し、この家庭層は本来、原理的世界にのみ立てられることになっていたのである。『原理講論』ではこの祝福家庭を「神を中心とした家庭的四位基台」または「神を中心として四位基台を

成した家庭」(六七ページ)と表現している)。

ところで、非原理世界においては、その世界を原理世界へと復帰するためにメシヤ(第三アダム)が来られることになっており、そのメシヤを中心に新しく祝福家庭を地上に立てることによって形成されるのがこの階層である。

(2) 非原理的天上世界(霊界)の四大階層

非原理的な地上世界と同じく、非原理的な天上世界にも四大階層がある。中間霊界、地獄、霊形体級霊界、楽園がそれである。ただし、この四階層は地上の四大価値階層と対応しているわけではない。

1 中間霊界(地上の初歩的な価値階層に対応)

ここは霊界に入った霊人が最初に一時的にとどまる階層であって、地獄の一つ上の階層にあたる。この階層での滞留が終わると、自分の意志で下層(地獄)または上層(霊形体級霊界)に移動する。

2 地獄(地上の価値不在の階層に対応)

ここは中間霊界の下層を成していて、地上生活の第一階層(価値不在の階層)に属していた霊人、すなわち自己中心の生活をしてきた霊人が中間霊界を経て入っていく霊界であり、暗くてじめじめして悪臭の漂う所である。

3 霊形体級霊界(地上の長成的価値階層に対応)

中間霊界の一つ上にある霊界で、地上生活の第二階層(初歩的価値階層)に属して生きていた霊人が中間霊界を経て入り、住むようになる霊界である。

4 楽園(地上の完成的価値階層に対応)

霊形体級霊界の上に位置する霊界で、地上生活で第三階層(完成的価値階層)に属していた霊人が中間霊界を経たのち、霊形体級霊界を経ずに直接入る所である。楽園はさらに三層に分かれており、第一層、第二層には地上で長成的価値階層に属していた霊人が住み、第三層(最も高い層)

には地上の完成的価値階層(第四階層)に属していた霊人が住んでいる。

(3) 霊界の特別階層

ここは地上でメシヤを中心とした特別階層に属していた霊人、すなわち祝福を受けて家庭的四位基台を成して生活した霊人が中間霊界を経ないで直行する霊界で、正にこれが原理でいう天国なのである。

しかし、この天国には今までは、住人がいないのである。将来、再臨のメシヤによる祝福家庭が昇華して、そこに住むことになっている世界であるからである。

(二) 霊界の四大階層の内容

(1) 中間霊界

すでに述べたように、地上生活を終えて霊界に行き、最初にとどまる所が中間霊界である。(肉身を脱ぐ瞬間、不思議なことに、知的能力が五十倍にも発達し、多くのこと

を学ばずとも知っているがごとくに感じとるようになる。

ところで、死後、霊人が中間霊界に至るまでには一定の過程を経る。死んだ直後、天使または霊人たちの案内を受けたたり、エレベーターに乗るような感じで引き上げられていったり、時には何か洞窟の中を通るようにして、そこに至る。またある時には、その途中で何者か（ガイスト）の超越者の懐に抱かれているような気分、温かい慰労を受けることもある。

死後の霊人が中間霊界に達すると、言行は完全に自由放任となる。いかなる言行も思いのままになされる。この中間霊界では、一家親戚、知人などの一部が現れて大喜びで迎えてくれる。しかし、しばらくすると彼らは自分の住む場所に帰っていく。この中間霊界では、いわゆる閻魔鏡（エンマキョウ）の現象が起こる。すなわち、自分の過去の行いがすべて映画のように映像で現れ、そこに集まった人々に見せられる。人知れずなされた善行も、あるいは秘密の悪行も、すべて白日のもとにさらされる。

これは賞罰を与えるためではなく、霊の類型を区別するための判別現象なのである。この類型の判別によって、その場に同席していた霊人たちのうち、新しく入った霊人とながら、さまざま歩いたり、地上人に憑（ひょう）いたり（憑依）、幽霊になって地上人を苦しめたりすることもある。これは大部分、自分が死んだことを自覚できないために起こる現象である。

この中間霊界に入った霊人たちは、まずその環境の美しさに驚く。色とりどりの花の美しさや、鳥の鳴き声の美しさに感嘆する気持ち（キモチ）が自然にわいてくる（地獄を除けばすべて美しい環境ばかりであり、階層が高くなるほどその美しさも輝きを増す）。原理には「その世界がいかに美しく幸福なところであるか、見ればはつきりと分かる」（「原理講論」二二一ページ）と書いている。

(2) 地獄

地獄は中間霊界の下にある。地上で価値不在の階層（第一階層）にいた霊人が中間霊界に入り、自分の過去が暴かれるのを目の当たりにしているところに、地獄人がやって来て連れられて行く所である。

地獄について、聖書には消えることのない火（マルコ九・43）または永遠の火（マタイ二五・41）によって罪人

同じ類型の霊人が、「類は友を呼ぶ」のごとく、その新しい霊を出迎え、自分が住んでいる所（楽園、霊形体級霊界、または地獄）に案内する。この時、その案内に従って行くかどうかは完全にその霊人の自由である。

夫婦の因縁・その現場に、新しく入った霊人の妻または夫（すなわち先に霊界に行っていた妻または夫）が訪ねてくることが多い。しかし、彼らの性格が互いに合わない場合には永遠に別れることになる（性格が合う場合はもちろん再び同居するが、彼らが永遠の天国に入籍するには、いつかは祝福を受けなくてはならない）。

地上での習慣は、この中間霊界でも一定期間持っているが、やがてそのすべてを捨てるようになる。そうして霊界の法に従って生活するのである。そのとき、地上での名譽、知識、権利、欲望、財産、お金などはすべて無用のものとなり、地上で身につけた永遠の真理と価値（真の愛とそれに基づいた真・善・美など）だけがその霊人の評価基準となる。

この中間霊界で、数日ないし五十日程度とどまっている間に、「類は友を呼ぶ」のごとく案内者が現れ、新しい霊人の行く先が決まるが、時には長期間この階層にとどまりたちが苦痛を受ける所と記されており、陰府（ヨム）（黄泉（ヨミ））（詩篇一六・10、使徒行伝二・27）または底知れぬ所（黙示録九・1、一七・8）とも表現されている。「原理講論」には、地上地獄に住んでいた人が肉身を脱いで霊界に入ってきた所で述べた霊界の知見は、文先生のみ言を中心に、霊界の霊人たちの通信、死後の世界を体験して生き返った人たちの証言を資料としたものである）

この地獄もさらに三層からなっているが、この三層の共通点は真つ暗で悪臭が漂い、陰気でじめじめとした残酷な世界であるという点である。地上生活での価値不在の程度とその期間の長さ（どのような悪行を、いかに悪辣に、どのくらい長く行ったか）によって階層が決定される。

第一層は中間霊界のすぐ下の層であり、真つ暗で悪臭が漂う。ここでは、死相で憎悪と怒気に満ちた顔の霊人たちが復讐に燃えて怒りちらし、殴ったり蹴ったりしながら延々と争い続けている。

その中には、さまざまな妖怪の顔（真つ二つに割れた顔、目玉が抜け落ちた顔、鼻をそぎ取られた顔、耳が長く突き出た顔など）の霊人たち、あるいは、上半身は人間で下半

身は動物の姿をした霊人たちもいて、やはり憎しみと争いの限りを尽くしている。

この第一層の霊人たちの中には極めてまれに、地上の後孫たちの祈りや精誠の力を借りて自分の罪を悔い改め、善霊になろうとする者も現れる。彼らは入り口とは別に備えられた出口を探し求めて千辛万苦ではい上がり、その出口の外側、すなわちより高い階層に上っていく。

その時、外には（つまり上の階層には）天使や善霊たちが来ていて、下から上ってくる者を喜んで出迎える。そして、新しく建設された高速道路のような道をたどって霊形体級霊界に直行する（高速道路のような道が建設されるまでは再び中間霊界を経て行かなくてはならなかった）。

地獄の第二層は、第一層の下にあり、さらに暗くて陰気な所である。ここにいる霊人たちの姿はこの上なく残酷である。

足は土の中にもぐって、木の幹が根で固定されて動けないのと同様に身動きできない。分かりやすくいえば、上体のみ人間で、下半身は木の根になって何百年も何千年も地に埋まって一步も動けずに苦しんでいるのである。その大部分は地上で自殺した者たちで、一部は残酷な殺人を

犯した者たちである。（自殺は地上では罪にならないが霊界で重罪として扱われる。彼らが自らの意志でここに入ってきたことはいまでもない）

第三層は第二層の下にあり、第二層以上に暗くて陰湿であり、ひどい悪臭が漂っている。第二層の自殺者たちは、それでも自由に呼吸はできる。しかし第三層の霊人たちは、ある所では、真つ黒の大きな沼のような油の池の中に沈んで呼吸できず、ときおり水面上が上がってきたは、油にまみれた真つ黒な顔で精いっぱい長く息を吸い込むと、また沼の底に沈んでいく。これを何百年何千年と繰り返すのである。またある所では、真つ黒な海辺にやはり油で真つ黒になった人間が石の柱のように直立しながら、時折、か細い嘆き声をあげている。

この第三層の地獄は、刑罰に例えるなら極刑中の極刑に当たり、彼らの素性は明らかにされていないが、おそらく地上で大虐殺を平気でやっていた暴君や独裁者たちの末路ではないかと思われる。

しかし、彼らを含むすべての地獄の人たちにも、いよいよ救いの光が照らされる時が来る。再臨のメシヤの手で地上に天国が完全に成されたとき、メシヤの恩寵により霊

界の地獄が完全に解放されるからである。霊界の地獄は地上の地獄から生まれた所なので、地上の地獄がなくなれば霊界の地獄もなくなるのである。「原理講論」には、神のみ旨が成された「理想世界に地獄が永遠なるものとして残ることはできない」（二三五ページ）と記されている。

（3）霊形体級霊界

この霊界は中間霊界の上であり、良心家、慈善家、愛国者、教育家、善を積んだ人、徳のある人、道人など、地上で初歩的な価値階層、すなわち第二階層に属していた霊人たちがこの霊界に住んでいる。これらは、成長の原理でいうなら、蘇生階段まで人格が完成した霊人、すなわち霊形体を成した霊人たちである。

神の摂理から見ると、この霊人たちは旧約時代、すなわち行義時代の義人たちと同程度の価値基準にある霊人たちである。実際に、旧約時代の義人の中には、まだこの階層にとどまっている霊人もいる。

稿 霊形体級霊界から上の階層の霊人たちは、心がガラス箱のように透き通って見え、互いに心の内を知ることができ

るため、同じ性格の霊人たちが同じ場所に集まって住むようになる。かくして、そこにはさまざまな特性をもった人々の部落が散在しているのである。

この部落に入っていくと、最初は静寂そのもので、余りにも静まり返っているため心が不安になることもある。しかし、間もなくしてその部落の住民たちが満面の笑みを浮かべて出迎えてくれる。こうして歓迎を受けた後、状況はまた大きく進展する。心と心が通じ合い、互いの心の中の声を感じとることができるよう、すぐに親密な関係になる。霊形体級霊界の自然環境は、明るく暖かい太陽の光（実は愛の光）を受けていて、地上世界とは比べものにならないほど温和で明るく美しい。山と野原と川の調和、野原に咲き乱れた花の美しさ、木々の中でさえずる小鳥たちの歌声などが、そこに足を踏み入れた霊人たちの心を酔わせる。つまり、中間霊界よりもさらに明るく暖かく美しい所なのである。

この霊界の霊人たちは、協力し合って休みなく何かを製作し続けている。その作業は、想念でもって心の中の作品（家、庭園、自動車、飛行機、高層ビル、機械、道具など）を作ることで、霊界で使うためではなく地上の将来のため

に作るのである。言い換えれば、地上人が作品を作ったり建築できるのは、すでに霊界で作られた作品や建築を、後に霊人たちが地上人に働きかけて構想を思いつかせるからなのである。

この階層の霊人は地上で善の功績を積んだ者たちなので、その善の経験を地上人に教えて、さらに多くの善(愛)を実践させるために(そうすることによって霊人自身がより高い段階に上がるために)、たくさんの霊人が地上に下りてきて、自分と相対基準の合う地上人に協助するのである。(『原理講論』二二五ページ)

この霊界には、神の真理と愛を教える学校があり、地上で神を知らないまま天上に来た霊人たちが集まってその教えを受ける。この霊界には幼稚園もあって、幼い年齢で霊界に来た子供たちを養育している。彼らは地上での経験がないため、天上にいながら地上のことを学ぶのである。もちろん、神についても学んでいる。

この霊界には地上のような時間・空間はなく、行きたいと思うだけでどこへでも行けるし、過去の人にも会える。霊界では状態の持続感が「時間」であり、心で関心をもつ範囲が空間なのである。

A 下層の楽園

地上で長成的価値階層(第三階層)に属していた人々で、信仰の篤いクリスチャン、および同じ級位にあるさまざまな宗教(儒教、仏教、回教、天道教など)の信者がこの階層に属し、宗教人でなくともこれらの宗教の信者と同等の善の功績を積んだ道人、義人たちもこの段階の楽園にいる(註:天道教は、崔水雲^{オニエスガ}によって創始された韓国の民俗宗教である)。

彼らは、成長の原理からいえば、人格の成長が長成期蘇生級に到達した霊人、すなわち生命体を成した霊人たちで、神の摂理から見れば、新約時代(信義時代)の聖徒に相当する成長基準にある霊人たちである。この階層には、新約時代の多くのクリスチャンが今も住んでいるのももちろんである。

寄稿

この階層にはキリスト教以外の宗教の信者、道人、義人たちが住んでいる。彼らは地上にいる間、神を知らずに生活していたが、彼らの成長基準は善の功績を積んだクリスチャンに匹敵するほど高く、さらに霊界ですでに神と神

霊形体級霊界の霊人たちは、皆純白の衣服を着ており、霊界に入ってしまったら後には空中浮遊の能力を持つようになる。

(4) 楽園

楽園は、霊形体級霊界の上に位置し、ここには地上で長成的価値階層(第三階層)と完成的価値階層(第四階層)に属していた霊人たちが住んでいる。

楽園の自然環境は霊形体級霊界よりもさらに明るくさらびやかで美しい。山はますます雄大さと美しさを増し、川はまばゆいほど青く、平原には見事に咲き乱れた花とそのかぐわしい香りが霊人たちを祝福し、小鳥たちの歌は美しい音楽となって霊人たちの心を慰勞する。この美しさは、上層の楽園に上がるにつれて一層輝きを増していく。そして楽園の上層では、美の極致に陶醉しながら恍惚^{こうご}の境地で生きるようになる。

この楽園には、さらに上・中・下の三層がある。すなわち、下層の楽園、中層の楽園、上層の楽園がそうである。次に各層の内容を紹介する。

の愛を知って実践している。

この段階の霊人たちは純白の衣服をまとい、その衣服はほのかな光を発していることもある。

B 中層の楽園

この階層の霊人は、地上で完成的価値階層(第四階層)に属していた者たちで、キリスト教以外の各宗教の教祖たちである。神のみ旨と愛を万民に教えながら、そのみ旨と愛を自ら実践した指導者たちである。釈迦、孔子、マホメット、崔水雲などがこれに属する。彼らが地上で説き実践した教理と愛の主体(神、如来、天、アラール、天道教の神など)は、たとえ表現は違ってもいずれも一なる絶対者である「神」なのである。

成長原理からいえば、長成期の長成級に人格が成長した霊人であり、教祖である彼らは、敵をも許し愛して、人生をひたすら人類のために生きた人々である。その純白の衣服は神々しい光を発し、頭の部分には後光が四十〜五十七センチの大きさの金色の輪を描いているのが見える。

しかし、彼らの説いた愛は成熟した愛ではあるが、主と

して隣人愛、人類愛、同胞愛、哀れみの愛、敵に対する愛など、横的な愛であった。孔子を例外として、家族間の愛はそれほど強調していない。父母の愛を中心とした家族間の愛を説いたとき、初めてその愛は完全なものとなる。原理的に見ると、聖賢たちの説いた愛は家庭における兄弟愛の拡大型に過ぎない。その点ではイエス様も同じであった。

一方、孔子は家庭倫理（親孝行、兄弟友愛、夫婦有別など）を説いてはいるものの、最も重要な父母が子女に注ぐ愛については十分に強調していない。原理的には、子女の父母に対する孝行（孝誠）には、父母の子女に対する愛が先行するようになっていく。

要するに、これまで各宗教の教祖たちが説いてきたのは、すべて兄弟愛を拡大した愛に関するものだったのである。その理由は、これまでの聖賢たちの立場が、厳密にいえば天使長の立場であると同時に墮落直前の未婚段階のアダム・エバの立場にあり、さらに後に来られる第二アダムの降臨を準備するための立場だったからである。未婚段階のアダム・エバは兄弟姉妹の立場であるから、その愛は兄弟姉妹の愛でしかない。天使長の立場で墮落前のアダムの降臨を準備する立場にある聖賢たちは、兄弟姉妹愛の拡大型

述べたとおり、イエス様はまだ家庭的四位基台を完成していないため、今も楽園におられるのである。

楽園のイエス様は、確かに地上では主として兄弟愛を説かれたが、天上（楽園）では万人と万物への全き愛をもって、神と共に全霊界を治めてこられた。しかし、地上に再臨のメシヤが来られて、「真の父母」の宣布までなされたため、今後、全霊界は再臨のメシヤの主管を受けることになる。

前述したとおり、楽園の自然環境は例えようもないほどさんぜんたる美しさで、とくに上層の楽園は、その美しさと調和においてまさに理想郷そのものである。花の美しさは例えようもなく、その香りは愛のささやきにも似て人を酔わせる。まさしく文字どおり楽園である。

（四）霊界の特別階層Ⅱ天国

寄稿

この階層は原理によると、地上で「創造理想の実現された地上天国」の生活を終えたのちに肉身を脱ぎ捨てて行く所（『原理講論』一三六ページ）であり、厳密には聖書でいう天国とは意味が異なる。聖書、とくに新約聖書の天国

として隣人愛、人類愛、同胞愛などを強調していたに過ぎなかった。つまり、聖賢たちが地上世界で見せた愛は、たとえ成熟した愛ではあっても完全な愛ではなかったのである。

その点ではイエス様の愛も同様であった。確かに神のひとり子であり、やがて人類の父母となるイエス様であったが、墮落前の未婚段階のアダムの立場（長成期完成級）であったために、主として兄弟の愛を説いたのである。

すなわち、主として兄弟愛を説いたという点で、聖賢たちもイエス様も同じだったのである。しかし、格位において聖賢とイエス様は全く異なる。聖賢たちは天使長の立場に過ぎなかったが、イエス様は神のひとり子だったからである。

それゆえ、同じ楽園でも聖賢たちは、イエス様より一段低い長成期の長成級に当たる中層の楽園にいるのである。

C 上層の楽園

ここは今までイエス様（救世主）が一人だけおられて、神の愛により霊界全体を治めてこられた所である。すでに

親はその概念が曖昧かつ多義的で、正確な定義づけがなされていない。

『原理講論』の説明をより具体的にいえば、前述したように、祝福を受けて家庭的四位基台を成して地上生活を終えた霊人たちが中間霊界を経ずに直行する所である。それは非原理的な霊界ではなく、原理的な天上世界であることから「特別階層」という概念を用いたのであるが、これが真の意味の天上天国なのである。

しかし、今のところ完成した一組の家庭的四位基台（父母、夫婦、子女）がこの霊界に行った例はない。祝福を受けて霊界に行った人（家庭を持った人）は相当数になるが、大部分がまだ祝福家庭として備えるべき条件を満たしていない家庭であるため、天国に正式に入って住んでいる例はごく少数であると伝えられる。そのほかは、天国に入れず、楽園と天国の間に新しい層を形成して、そこにとどまっているという。

祝福を受けても条件が満たされていないならば、天国と楽園の中間層はもとより、楽園の下層にも入れないのである。それだけに、祝福の価値がいかに大きいかが、推察でき

ところで、「原理講論」には地上天国が実現するまで

「天上天国はまだ空いている」とされ、実際今日までそこには住民はいなかった。しかし、人類の真の父母様の家庭を中心として祝福家庭が続々と増えているということは、地上に天国が実現されていくことを意味し、したがって天上天国は空ではなく、そこに天国人が増えていることを意味する。前述したように、少数であるが祝福家庭がすでに天国に入っている、というのはそのことである。

ただし、厳密な意味で天上天国はまだ空いているといわざるを得ない。なぜなら、天上天国の中心であられる真の父母様がまだ地上におられるからである。そして、十二の

真珠門からなる碧玉の城郭に囲まれた雄壮できらびやかな大宮殿は、まだだれも住んでおらず、金銀財宝が一面に敷かれた道には通る人もなく、平原を埋め尽くす花々の美しさと豊かな香り、鳥たちの快い歌声は、鑑賞してくれる主人に出会えずにいる。わずかばかりの天国人さえも、地上の仕事に協助すべく天国を離れているからである。

(この内容は、韓国の季刊「統一思想」通巻第三十三号より翻訳、転載したものです。なお、筆者により一部加筆、削除されました。文責・編集部)

God's 世界への神の希望II
Ambition FOR THE World
The Revolution in Bel. San Myung Moon 文 鮮 明



世界への神の希望II

文鮮明師が受けた米国での啓示(英語日本語対訳版)

文鮮明師講演集

■A5判 ■325頁 ■定価1400円(税込)

キリスト教の神髄と語学を学ぶために!!

ご注文は光言社受注センターへ
FAX.03-5478-1521
TEL.03-3460-0429

証

祈りと祈りの対決

なぜ私は統一教会に入ったか

山本 和幸
(6500 双)

私が生まれてから今日まで、ずっと神様は、私が統一教会に入るために導いてくれたのではないかと思えてなりません。

電器屋の長男として生まれ、教育熱心な祖父や父母に育てられました。音楽、剣道、英会話等の教育を受けましたが、わがままな私は途中でやめてしまい、長続きしませんでした。そんな中で、水泳だけは小学校の間ずっと続けました。小学校二年生の夏、スイミング・スク

ールへ行く途中交通事故に遭い、長い間入院生活が続きました。

勉強が嫌いなうえ、学校を長期間休まなければならなかったため、算数や漢字など、全く分からなくなっていました。病院での退屈な生活は、ただお見舞いに来てくれる人を持つだけの生活で、神も仏もあるものかと思っていました。

退院後しばらくして、カブ・スカウト(ボーイ・スカウトの小学生のグループ)に入り、募金活動や地域の掃除など、遊

びながら奉仕活動をしました。また、所属のボーイ・スカウトがお寺にあったので、住職さんの法話も聞き、幼心に、宗教っていいものだなあと思うようになりました。

学校では冴えなかった私は、ボーイ・スカウト活動に熱心になりました。また、クリスマスの際に、母がプレゼン